

＜翻訳＞ バーバラの結婚式 (1918)¹

作： ジェイムズ・マシュー・バリー

訳： 秋田大学 大西 洋一

＜登場人物＞

大佐（名はジョン） デリン（庭師） ビリー（大佐の孫のウィリアム [ウィル]）
 バーバラ（ビリーの幼なじみの娘） カール（ビリーとバーバラの友人であるドイツ人）
 エレン（大佐の妻）

大佐は自分の田舎家の居間におり、開いた窓越しに美しい庭を見つめている。大佐はかなり年をとっており、最近では時々頭が混乱することがある。芝居の幕開きの時に、大佐はちょうど過去の幻影を見ているということ、皆さんには理解していただかなければならない。大佐は現実の人間が彼のもとを訪れていると思っているのだが、そうではないのだ。大佐は、はしごに登って枝の剪定をしている庭師のデリンに声を掛ける。大佐のもとにやってくるデリンは、いかつい有能な若者で、鋤の代わりに手をよく使うので、もう指が切り株のようになり始めている。これは、デリンがこの世で華々しい成功をおさめることはないというしるしである。デリンの頭も彼の指と同じようなものであり、土まみれの阿呆になって働くのだ。デリンは、一年か二年後に1シリング6ペンスの昇給を得て、それをもとに結婚し、頭は鈍く、体も重くなっていく。要するに、賢い人であればもう彼の墓碑銘を書くことができるのだ。

大佐 すばらしい朝だな、デリン。

デリン 太陽がきつすぎますぜ。バラは文句たらたらですし、悪いことにや、バーバラお嬢さんがバラに水をやってらっしゃいます——それも昼の日に。

大佐 そうかい。よかれとやってのことだよ。（だが、大佐を悩ませているのはそのことではない。大佐はおずおずとその問題に近づいていく。）ところで、デリン、お前は耳にしなかったかな。（大佐は、デリンに聞いたと言ってもらいたいのだ。）

デリン 何のことでさ。

¹ 執筆は1917年と推定され、1918年に出版され、初演は1927年である。詳細は「解題」参照。なお、登場人物表は原作にはないが、読者の便のために訳者が付した。

大佐 雷雨だよ——けさ早くの。

デリン 雷などございませんでしたがね。

大佐 (がっかりして) みんなそう言うんだがね。(大佐はとても礼儀正しいので、誰の言葉も否定しないのだが、もう一度試しに言ってみる。大佐には、自分が正しいと思う人間の執拗さがある。) あれは4時だったな。起き上がって窓の外を見てみたよ。月見草がとてもきれいだった。

デリン (同じく頑固に) 月見草はあんまりいいとは思いませんがね。わたしは四時には外に出て働いてましたぜ。雷はございませんでしたよ。

(大佐はなおも雷雨があったと考えているが、デリンの機嫌をなだめたいと思う。)

大佐 ただ雷雨があったと思っただけかもしれないな。恐らく、わたしが耳にしたのは、昔々の雷雨だったのだ。雷雨は戻ってくるからなあ。

デリン (のろのろと) そうですか。

大佐 お前が庭で動き回っているのを見るのはうれしいよ、デリン。すべていつも通りでな。

(この言葉には、あたかも大佐が何か情報を引き出そうとしているような、慎重に発せられた巧みさがある。しかし、それはデリンには巧妙すぎていて、彼は「どうも、旦那様」と言って、立ち去ろうとする。)

いやいや、行くな。(この老人は声をひそめて、しぶしぶ打ち明ける。) わたしは——ちょっとばかりわけがわからなくなるんだよ、デリン。

(デリンは、ご主人の頭がどこかをさまようことを知っているので、やさしく答える。)

デリン みんな大丈夫ですさ、旦那様。

大佐 (ほっとして) それはよかった。デリン、お前が戻ってきてくれたので、わたしはうれしいよ。こんなに長いこと、どこへ行ってたんだい。

デリン わたしがですか。(少し腹を立てて) わたしはクリスマス以来、一日たりとも休みをいただいておりますがね。

大佐 そうだったかい。わたしはてっきり——

(大佐はなにげなく話そうとするが、彼の声には不安げなじれったさがある。)

大佐 デリンよ、すべていつも通りかな。

デリン ここより変化のないところはございませんでしょう。

大佐 その通りだな。そう言ってくれとありがたいな、デリンよ。(だが、次の瞬間、また声をひそめた。) デリン、何かおかしいところはないかい。何かが起こっているんだが、わたしに話していないことなどないよな。

デリン わたしが知る限りはございませんねえ。

大佐 みんなそう言うんだが、しかしね——わからないな。(大佐は壁にかかっている古い剣を見つめる。) みんなはどこだ。

デリン みなさん外に出ているらしいです。村の共有地でクリケットの試合をやってますからね。

大佐 そうかい。

デリン 少し南風が吹いているようでしたら、皆さんの声が聞こえるでしょうよ。旦那様は、かなりのクリケットの名人でしたな。²

(大佐は速球投手に立ち向かう自分の姿を思い浮かべる。彼は思い出して、喜んでいる。)

大佐 マローフィールド戦で99点。そして脚のパッドにあたってアウトだ。これまでのわたしの最高得点。マローフィールドはもう一点加えて百点にしたかったんだが、わたしがそうはさせなかった。わたしはスリップ[外野手]の間を縫うように打つのがとてもよかったからな、デリン。わたしのレイト・カット[打法]を覚えているかい。ポイント[野手]がどこに立っていようとかまやしなかった。それを越えていったからな。デリン、お前はポイントだったな。

デリン それはわたしのじいさんですよ、旦那様。じいさんの言うことを信じるなら、ポイントをしていてよく旦那様をアウトにしたそうですよ。

(大佐はしょんぼりするが、心をなごませるような笑みを浮かべる。)

大佐 そうかい。恐らくそうだったんだろうな。今じゃわたしもプレーできないが、見るのは好きだな。(大佐の頭は再び混乱する。) デリン、今日は緑地でクリケットはやっていないよ。見に行ってきたんだ。わからないなあ、デリン。わたしが着いた時には、芝生の上にみんなが点々といたんだよ。だけど見ているうちに、一人、そして二人と消えていってしまった。アウトになったわけではないんだよ。まるで呼び出されたみたいになくなったんだ。まだ若い連中は残っていたさ——だが、やがて彼らも消えてしまった。また呼び出されたみたいだね。ウィケットだけがただそこに残されていた。なぜなんだろうね。³

デリン ただの空想ですぜ、旦那様。昨日、ウィル様がバットに油を塗っているのを見ましたよ。

大佐 (乗り気で) そうかい。見たかったな。あいつらの代わりによくバットに油を塗ってあげたな。不注意なやつらだからな、いつも忘れる。あのやさしいドイツの男の子も一緒だったかな。

デリン カールさんですか。近くにいらっしやいましたよ。川の岸辺にすわって、フルートを吹いてなされた。そしてパーバラお嬢さんは、わたしのリンゴの木によじのぼってらっしゃった——お嬢さんは、旦那様のリンゴの木とおっしゃっていますがね。(デリンは降りる。)

² パリーのクリケット愛好については、Kevin Telfer, *Peter Pan's First XI: The Extraordinary Story of J. M. Barrie's Cricket Team* (London: Hodder & Stoughton, 2010)が詳しい。

³ この場面については、「解題」を参照。

大佐 （おとなしく）それはそうだろ、デリン。

デリン まあ、ある意味ではそうですがね、旦那様方にこっちのことにかかずにわかってほしくはないんですわ。そこにお嬢さんがすわって、二本の木に青いリンゴをぶつけるときた。

大佐 あの子らしいな！（大佐は、鷹揚に首を振る。）どうやったらあの娘を慎み深い若き淑女に変えられるのか、わからないなあ。

デリン 村のみんなは、ウィル様がやってみなさると言ってますぜ。

（大佐にとっては、これは最高に気の利いた言葉である。）

大佐 ハ、ハ、ハ、ウィルはただの若造だ。（しかし、笑いは途切れる。大佐は、デリンがもっと近づいてくれれば、真実がわかると考えているようである。）ところで、ここに今いるのは誰だ、デリン。この家ということだが。時々、忘れっぽくなってしまっていかん。みんなすぐ年をとってしまうからな。若い盛りに一方のドアから出て行ったかと思うと、疲れ果てて白髪になって別のドアから戻ってくる。お前は気づかなかったかい。

デリン いえいえ、旦那様。ここに泊まっていいらっしゃるの、パーバラお嬢様とカール様だけでございます。お二人と旦那様方だけ、そう、あとは旦那様と奥様とウィル様だけです。それだけでさ。

大佐 うん、それだけだな。デリン、誰が兵隊だ。

デリン 兵隊ですか。一人も兵隊なんかおりませんぜ、旦那様を除いちゃ。

大佐 いないかい。兵隊と一緒に看護婦もいたなあ。誰が病気なんだい。

デリン 誰も病気じゃありませんし、看護婦などいらっしゃいませんがね。（デリンはこの老人のもとから後ずさる。）奥様をお呼びしましょうか、旦那様。

大佐 いやいい。あいつは村に行ってしまった。理由を言っていたが、忘れてしまったな。パーバラも一緒なんだ。

デリン 旦那様、パーバラお嬢様は川辺にいらっしゃいます。

大佐 そうかい。みんな結婚式に行くと言っていたと思うんだが。（老人の好奇心で）今日結婚するのは誰なのかな、デリン。

デリン 結婚式のことは聞いていませんぜ。おっと、パーバラお嬢様だ。

（デリンがパーバラに会ってうれしいと思ったのは、恐らくこれが初めてである。陽気なじゃ馬娘のパーバラが飛んできて、血気盛んに跳ね回る。）

大佐 （陽気に）さあ、おてんば娘のお出ました。

（パーバラは、いぶかし気に片方から片方へと視線を送る。）

パーバラ デリン、きっとわたしが間違った時間に花に水をやると大佐に文句を言っているとこ

ろね。

(大佐は、バーバラの方がデリンよりも気が利いていると考えているのだ。デリンは、ひどくきまり悪い思いをする。)

デリン ちょうど言ったところでさ、お嬢様。

バーバラ ひどい人ね！(バーバラは庭師に向かってぼさぼさの髪を振り乱す。)ねえ、デリンの言うことなどお気になさらないで。デリンが、俺の花が、俺のリンゴがって言うたびに、面と向かって、大佐のよって言ってやるわよ、わたしが。

大佐 今時の若者は度胸があるなあ！

(デリンの下唇がきりりと結ばれるが、庭へと去っていく。バーバラは、大佐のご用に答えようとする。)

バーバラ 楽にしてあげますわ——おばあさまがなさるように。

(バーバラはぎこちなくクッションをあててやる。)

大佐 あいつがやるのとはちょっと違うがな。バーバラ、お前はあいつのことをおばあさまと呼ぶのかな。

バーバラ おばあさまはそう呼んでとおっしゃいましたわ——練習のためにと。なぜだか覚えていらっしゃいますか。

(もちろん、大佐は覚えている。)

大佐 知ってるさ。ピリー坊主のことだろ。

バーバラ 今日頭が回りますのね。さあ、わたしが杖を持って来るまでお待ちになって。

大佐 すわっている時は、杖はいらないがな。

バーバラ 杖を持ってすわってらっしゃると、とてもさまになりますのよ。(バーバラは、クッションをひっくり返してしまう。)あらまあ！わたし不器用なのよね。

大佐 (おだやかに)全然そんなことはないよ。でも多分、自分でやってみたらどうかな。(大佐は自分で楽な姿勢をとる。)これでだいぶよかった。バーバラ、どうもありがとう。

バーバラ わたしがしてあげたわけじゃないわ。わたし本当にへたくそなのよね。きつとんでもない看護婦になるわ。

大佐 看護婦だって。(大佐の頭の混乱が再び始まる。)あの女は誰だ、バーバラ。

バーバラ 誰が誰ですって。

大佐 あの看護婦さ。

バーバラ ここに看護婦はいませんわ。

大佐 いないのか。

バーバラ （今日は、これまで以上に自分が役に立たないと感じながら）おばあさまはどこかしら。

大佐 結婚式に出るために村に行ったよ。

バーバラ 結婚式なんてないわよ。誰が結婚なんてしようと思うのかしら。

大佐 わたしが知っている人なんだが、誰だか覚えていないんだよ。バーバラ、お前も行ったと思
ったんだがなあ。

バーバラ わたしは行ってないわ。もし結婚式があったとしたら、わたしが見逃したと思う。

大佐 お前と看護婦はな。

バーバラ あらあら、またあれこれとあらぬことを思い始めてしまったようね。一曲弾きましょう
か、それとも歌いますか。（バーバラは椅子をひっくり返してしまう。）まあ、みんなわたしの邪
魔をするのね。「ロビン・アデア」⁴ を唄いましょうか、おじいさま。

大佐 （丁寧に、だが決然と）いや、結構だ、バーバラ。（しばらくの間、大佐はバーバラのことを
忘れてしまう。彼の頭が再びさまよい出してしまったのだ。）バーバラ、家がからっぽのようだ
な。ビリーとカールはどこにいる。

バーバラ ビリーはカールのいるところにいますよ、きっと。

大佐 で、カールはどこだ。

バーバラ カールはビリー坊やのいるところにいますよ、きっと。

大佐 では、二人はどこにいる。

バーバラ バーバラがいるところから遠くはありませんよ、絶対に。（バーバラは窓辺に飛んでいっ
て、手を振る。）カールのフルートが聞こえるかしら。二人とも午前中はずっとあのハンノキが
ある淵にいたわ。あのイワナを捕まえようとしてね。

大佐 二人には捕まえられなかつただろ。誓ってもいい！

バーバラ お聞きになったらどう。

大佐 わたしはあのイワナを捕まえようと、青春時代をたんまり費やしたんだ。六十年前には、あ
そこに転がり落ちてな。

バーバラ わたしは六十分前に転がり落ちたわよ！ 同じイワナのはずがないわよ、おじいさま。

大佐 同じ野郎だよ！

（ビリーとカールは、釣り竿を外に置いて、窓から入ってくる。二人は、明るく屈託のない、
魅力的な若者である。）

バーバラ （高飛車に）泥だらけになっちゃって。

⁴ Lady Caroline Keppel (c. 1734-1769) が、恋い焦がれるロビン・アデア (Robert Adair, ?-1737) に
あてて書いた歌。彼と離れると世界が一変してしまうと嘆く娘の恋心を歌っている。

大佐 （明るく言葉を放ち）ピリー坊主よ、あのイワナを仕留めたかい！

ピリー けだものだよ、あいつは。

大佐 そうとも。わかってるだろう。

ピリー 何度かやって来ては、ぼくの毛針を見るんだ。でもさわったりはしない、そんなありがたいことなど全然してくれないんだ。ただあくびをして、もぐっていただけさ。

大佐 あくびをしたのか。わたしの時には、ウィンクしたものだっただがな。カールよ、お前とピリーはハイデルベルクで釣りをしたのかな。

カール われわれはもっと立派なおつとめをしていましたが、時にはくつろいだりもしていました。

ピリーよ、覚えているかい——（カールは陽気なダンスを始める。）

ピリー ぼくは知らないよ。（すると、ピリーはダンスに加わる。）

バーバラ 若い殿方どの、なんてみっともない！（バーバラも加わる。）

大佐 むちゃくちゃなやつらだな。

カール 大佐は君たち二人のことを知っているのかい。

ピリー よく物忘れをするんだよ。また話してみよう。おじいさん、バーバラとぼくはおじいさんにお話があります。こういうことなんです。（ピリーはバーバラの体に腕を回す。）

大佐 （笑いながら）知ってるよ——知ってるさ。これ以上のことはないな。わたしはうれしいよ、バーバラ。

バーバラ 知ってるでしょ、おじいさま、ピリー坊やがイワナをひもと曲がったピンで捕まえようとしていて、落ちこちないようにわたしがピリーの前掛けをつかんでいた頃から、ずっとわたしはピリーのことを愛していたの。学校じゃ結婚ごっこで、結婚させたり、嫁に出したりする遊びをしていたわ。わたしの花婿役をする女の子は、いつだってピリーという名前じゃなければだめだった。「なんじはこの男ピリーを——」って、スカートをはいた牧師が言い始めると、わたしがおずおずと答える前に、他の女の子が必ず叫んでいたの。「もちろん、バーバラは誓うわよ。」

大佐 （上機嫌で）指輪を忘れるなよ、ピリー。何たって、わたしが結婚した時には、指輪を見つけれなかったのだからな！

カール ここで結婚されたのですか。

大佐 そうさ、村の教会でね。

ピリー ぼくの父と母もだよ。

大佐 （目が庭へとさまよいながら）妻と一緒に歩いて戻ってきたのを覚えているよ。窓を通過してここへ連れてきてね。彼女は家具にキスをしていたよ。

ピリー バーバラ、君はもっと盛大な式の方が好きじゃないかと思うんだけど。

バーバラ いいえ、まったく同じでいいわ。

ピリー 君がそう言ってくれないかなと思っていたよ。

バーバラ でもね、ピリー。わたし、本当に夢みたいにしてきなウェディング・ドレスを買うことになっているのよ。おばあさまがわたしとロンドンに行っておばあさまに選んでくださるの。(大佐の肩に頭を寄せながら) もしおじいさまが一日おばあさまを貸してくださるならね。

大佐 (やさしく) わたしも一緒に行くよ。お前とおばあさまだけにドレス選びをまかせるわけにはいかないからな。

カール わたしたちがみんな外に出て楽しんでいる時、あなたはしばしば大変寂しい思いをしているのではありませんか。

大佐 みんなそう言うよ。だが、そんな時こそわたしは寂しくないんだよ、カール。そのような時こそ、物事をとてもはっきりと見ることができるんだ——過去ということになるがね。過去が一斉にわたしのところに押し寄せてくるんだ——インド、クリミア半島、そしてまたインド⁵——そして、それがすべて本物のように思えるのさ、とくに人がね。みんなわたしのところに来て話しかけてくる。彼らに実際に会っているように思えるんだ。お前のおばあさんがあとで教えてくれるまではわからないんだよ、ピリー、彼らがここに来たことなどないってことが。

ピリー ああ、知ってるよ。おばあさんはどこだろう。

バーバラ こんなに長いことおじいさまをほうっておくことなんか、そんなはないわよねえ。

大佐 外出しなければならぬって言ってたが、どこかは覚えてないな。ああ、そうだ、村へ結婚式に行ったんだった。

ピリー 結婚式かい。

バーバラ しつこく繰り返し言うのよ、変よね。

大佐 あいつは言ってたさ。聞いて、結婚式の鐘の音が聞こえますよ、って。

バーバラ 今日じゃないわよ、おじいさま。

ピリー おじいさんを困らせないほうがいいよ。

バーバラ だけど、おばあさまは言ってたわ。おじいさんにとって物事をはっきりさせなければいけないわ、って。

ピリー おばあさんが結婚式に行くって言った時、一緒に誰かいたかい。

大佐 (バーバラが認めてくれることを請い願うように) お前がいただろ、バーバラ。

バーバラ いいえ、おじいさま。前にもわたしにそう言ったの。それと何か看護婦のこと。

⁵ 大佐が、シク戦争(第一次 1845-46、第二次 1848-49)、クリミア戦争(1853-56)、インド大反乱(1857-59)の時期に従軍していたことを示している。

大佐 （しつこく）看護婦もいたんだよ。

ビリー 他には誰かいたかい。

大佐 あの兵隊がいた。

バーバラ 兵隊もなのよ。

大佐 その三人だけだ。

ビリー でも、それだと四人になるよ。おばあさんとバーバラと、それに看護婦と兵隊だ。

大佐 みんないたさ。でも三人だけだった。

ビリー 変だね。

バーバラ （なだめるように）気にしないで、おじいさま。おばあさまがうまくおさめてくださるわよ。おばあさまはおじいさまにうってつけの人だから。

大佐 あいつはわたしにうってつけの人間だ。

カール もし結婚式があったとしたら、おばあさまは大佐と一緒に連れて行ったのではないでしょうか。

バーバラ もちろん、そうよ。

カール 結婚式をやさしく見守ることができぬほど、お年をお召しになったわけではありませんね。

大佐 （頭を振って）ハハハ、もしわたしが行ったなら、きっと新婦にキスしただろうな。結婚式の日には、花嫁はとてもかわいらしく見えるからな。ほかの時にはそうでもないことが多いけれど、結婚式の日にはみんなかわいいさ。

カール まだ、かわいい娘を見る目があるのですね。

大佐 ああ、そうさ。ああ、そうだと。

バーバラ わたし、全部わかったと思う。おばあさまはおじいさまに、ビリー坊やとわたしのことについて話していたんだわ。それでおじいさまは待ちきれなくなったのね。どんどん急いで結婚式の日になってしまったのよ。

ビリー ブラボー、やったね、バーバラ。

大佐 そうかもしれないな。お前がそこにいることになっていたのは確かだからな、バーバラ。

バーバラ わたしたちの結婚式よ、ビリー！

カール しかし、それでは他の人たちのことについて説明がつきませんが。

（大佐は動揺して動き回る）

バーバラ どうしたの、おじいさま。

大佐 よく覚えていないんだが、あいつがわたしのことを連れて行かなかったのには理由があると思うんだ。いいかい、バーバラ、お前の結婚式なんだがな、ビリー坊主がいることにはなってい

ないと思うんだ。

バーバラ わたしの結婚式にいないの！

ピリー おじいさん！

大佐 それには何か悲しいわけがあるんだよ。

バーバラ 結婚式に悲しいわけなんかありえないわよ、おじいさま。おばあさまは悲しい結婚式だったなんて言わなかったでしょ。

大佐 笑っていたよ。

バーバラ もちろん、そうだわ。

大佐 でもそれは、看護婦を喜ばせるためだけだと思うんだ。

バーバラ また、その看護婦！ おじいさま、もうそんなこと考えないで。結婚式なんかないんだから。

大佐 （なぜみんなが彼を欺き続けるのか不思議に思いながらも、やさしく）ないのかい。

（村の結婚式の鐘の音が鳴り始める。大佐は勝ち誇る。）

言っただろ。結婚式だ！

（鐘は華やかに鳴り続ける。ピリーとバーバラは互いに一歩近づくが、それ以上近づくことはできない。鐘は鳴り続け、三人の若者はこの場面から消えてゆく。）

彼らがいなくなり、ひとり残されても、大佐はなおも彼らに向かって話しかける。

やがて鐘の音がやむ。大佐は自分が今はひとりであることを知ってはいるが、理解できていない。太陽は明るく輝いているのに、大佐はとても寒そうに椅子に座っている。大佐は震える。この時点からお芝居の終りまで、大佐が今そこにいるものとして見ているのは現実の人々である。大佐は、妻が開いた窓を通して彼のもとにやってくるのを見て大層喜ぶ。大佐の妻は愛すべき老女で、結婚式の参加者にふさわしい華やかなドレスを身にまとっている。彼女の顔はドレスに似合って輝いている。再び彼女はとても幸せな女性に戻った。なぜなら、どんなに深い悲しみが彼女を襲ったにせよ、それから数年間経ったのだ。それは長い時間である。彼女ほど大佐のことを理解している人は誰もいないし、彼女のように大佐を慰めたり、大佐を空想の旅から連れ戻してくれる人はいない。大佐は急いで妻のもとに行く。大佐はもう寒くはないのだ。それこそ、彼女が大佐のためにしてあげていることに対するすばらしい見返りである。）

エレン （静かに）戻ってきましたよ、ジョン。そんなに長いことはなかったでしょ。

大佐 ああ、長くはなかったよ、エレン。散歩は楽しかったかい。

（彼女は微笑み続けているが、じっと大佐を見つめている。）

エレン 散歩に行ってたんじゃないのよ。どこに行くって言ったか覚えてないのかしら、ジョン。

大佐 いいや、結婚式だったな。

エレン (少しびくびくしながら) 誰の結婚式だったか忘れちゃってはいないわよね、どうなの。

大佐 教えてくれよ、エレン。

(もう大佐の頭は混乱していない。大佐はエレンが教えてくれるとわかっている。)

エレン パーバラの結婚式を見に行ってきたのよ、ジョン。

大佐 そう、パーバラの結婚式だった。みんな全然——ところでエレン、なぜわたしは行かなかったんだい。

エレン (おもしろい話をお話するように) ジョン、あなたが行ったら、ちょっと混乱するんじゃないかと思ったからよ。時々ね、あなたの頭がね——そんなに多くはないわよ、興奮したとき、たまにね——会ってると思ってしまうのよ——もうここにいない人に。あらまあ、あらまあ、帽子のひもをほどくのを手伝って下さらない。

大佐 ああ、わかってるよ。エレン、君がそばにいたらわたしは大丈夫なんだ。おかしいもんだな。

(彼女は笑って肩をすくめる。)

エレン おかしいわね、ジョン。あなたのところに走って戻ってきたわ。わたしはいつもあなたのことばかり考えていたからね——ピリー坊やのことよりもずっとよ。

(大佐はとても愉快である。)

大佐 みんな話してくれるか、エレン。ピリー坊主は指輪をなくしちゃったかな。あいつは絶対指輪をなくすって、みんないつも言っていたのさ。

(エレンは大佐の目をまっすぐ見つめる。)

エレン また忘れてしまったのね、ジョン。パーバラはピリー坊やと結婚したんじゃないのよ。

(大佐は立ち上がる。)

大佐 ピリーと結婚するんじゃないのか。わたしにまかせろ。

(彼女は大佐を椅子に押し戻す。)

エレン すわって、あなた。もう一回お話しするわ。あなたが困ることではないのよ、ジョン、だってあなたの兵士としてのお務めはもう済んだんですもの。それも立派におやりになったわ。ねえあなた、また戦争が起こっているのよ。それにわたしたちの国も関わっているの。わたしの兵隊さんが思いもしなかったような戦争がね。

(大佐は立ち上がる。いかめしい老人だ。)

大佐 戦争か！ そうなんだな。これでわかった。なぜ誰も言ってくれなかったんだ。わたしはまだ年を取り過ぎてはいないだろう。

エレン いいえ、ジョン、もう年を取り過ぎているわ。あなたにできるのは、ここに座って——わたしの面倒をみてくれればいいのよ。今朝のあなたは、とてもはっきりとわかっていたわ。一緒に二階の窓のそばに立って、飛行機の機関砲の音を聞いていたのよ。

大佐 思い出した！ 雷だと思っていたよ。デリンは何も聞かなかったと言ってたがな。

エレン デリンですって。

大佐 うちの庭師だよ。わかるだろ。(大佐の声がかすれる。) わたしはデリンと話していたんじゃないかな、エレン。

エレン 庭師がいたのは、ずいぶん前のことよ、ジョン。

大佐 そうかい。そうだ！ 戦争だ！ だから緑地ではもうクリケットをやっていないのか。

エレン みんな戦争に行ってしまったのよ、ジョン。

大佐 その通りだ。小僧っ子たちまでな。(大佐はつぶやく。) なぜピリー坊主は戦っていないんだい、エレン。

エレン ああ、ジョン。

大佐 ピリー坊主は死んだのかい。(彼女はうなづく。) 作戦中に死んだのかい。教えてくれ、教えてくれよ！(彼女は再びうなづく。) ピリー坊主よ、でかしたぞ。ピリー坊主は立派な奴だとわかってたよ。泣くな、エレン。お前の面倒はわたしがみる。ピリー坊主も万事よしだ。

エレン ええ、わかってるわ、ジョン。

(再び話し出す前に、大佐はためらう。)

大佐 エレン、誰がああ兵士だったんだ。ここにやってくるんだよ。大尉なんだ。

エレン とても立派な人よ、ジョン。今日バーバラと結婚したのは彼なのよ。

大佐 (辛辣に) すぐに忘れてしまったんだな。

エレン (勇敢に頭を振って) 忘れてしまってなんかいないわよ、あなた。それに、ピリーが亡くなってからもう三年になるのよ。

大佐 そんなに長いこと経ったのか。あいつが手に入れた勲章を持っているな。

エレン いいえ、ジョン。勲章をもらう前に亡くなってしまったわ。

大佐 カールも残念がるだろう。あいつら二人は本当に仲良かったからな、エレン。

エレン カールはわたしたちと戦ったのよ、あなた。カールは同じ戦いで亡くなったのよ。互いに殺し合ったのかもしれないわ。

大佐 わからなかっただろうよ、エレン。

エレン (唇をとがらせて) 多分お互いにわかっていたわ。

大佐 ピリー坊主とカールがか！

(エレンは大佐にさらに話をする。)

エレン ジョン、バーバラの身内が誰もいなかったから、わたしはバーバラをここから嫁がせたわ。ビリーもそう望んだと思うのよ。

大佐 それでよし、エレン。お前はやさしいな。全部思い出したぞ。バーバラが結婚したのはデリンだ。昔うちの庭師だったやつだ！

エレン 世界はすべて生まれ変わっているのよ、あなた。デリンはバーバラにふさわしいのよ。⁶
(大佐はこの言葉を聞き流してしまう。大佐は同じくらい驚くべきことを思い出したのだ。)

大佐 エレン、バーバラは看護婦か。

エレン そうよ、ジョン、それもいちばん冷静沈着な看護婦よ。あの昔の明るいやんちゃ娘がそうなると思っただかしらねえ。ジョン、二人がお別れを言いここにやって来るわ。わずか数日しか休暇がないのよ。バーバラも今はフランスなの。バーバラは看護婦の制服を着て結婚したわ。

大佐 本当か。今日、バーバラはわたしに言ったぞ——いや、今日のはずがないか。

エレン あなたは二人に会ったと夢を見ていたのよ、多分。(エレンはまた震える。) ジョン、二人にやさしくなさせてね、いい。そして、二人の幸運を祈ってくださいね。二人の前途には試練が待っているのよ。

大佐 (切に) 何と言ったらいいんだ、エレン。

エレン ビリー坊やのことは何も言わないで、ジョン。

大佐 ああ、知らない振りをして。

エレン そして、ジョン、わたしだったら庭のことについては話さないわ。デリンがちょっと気にすると厄介だから。

大佐 (自分のことを策士だと思い始めて) 一言だって口にしないさ！

エレン (彼を発奮させる一番良い方法が何かを知っているので) わかるでしょ、きっとわたしはメチャクチャにしちゃうと思うから、あなたをあてにしているわ、ジョン。

大佐 (とても喜んで) わたしにみんな任せておきなさい、エレン。うまく立ち回ってみせるさ。お前は見ていればいい。

(エレンは窓辺に行き、結婚式を挙げた二人に合図をする。カーキ色の軍服を着たデリン大尉は、軍人らしい立派な姿である。バーバラは赤十字の制服を着て、静かでよく気が利く風である。手管にたけた老人は、二人にあいさつをする。)

大佐 おめでとう、バーバラ。いやいや、握手はいいよ。老兵の前をそうやって通り過ぎるつもり

⁶ たとえば、Noël Coward 作 *Cavalcade* (1931年初演)における Marryot 家の次男 Joey と、この家の召使である Alfred と Ellen の娘 Fanny の関係を参照。

じゃないだろうな。ごめんなさいね、若いの。(大佐はバーバラにキスをし、妻が自分をほれぼれと眺めているのを確かめようと彼女を見やる。)そして、君もおめでとう、デリン大尉——すばらしい賞を射止めたな。

デリン (すばらしい紳士となって) 承知しておりますとも。それを態度に示そうとしているところですよ。

大佐 (うろたえて) バーバラに結婚のお祝いをあげていなかったな、エレン。わたしは——
バーバラ いいえ、いただきましたわ。それもすばらしいものを。お忘れになったのかしら。

(老妻は大佐に合図を送る。大佐はただちに、とても巧みに言う。)

大佐 ああ——それぞれ！ちょっと試しに聞いてみただけだよ、バーバラ。あなたにはぜひ負けないくらい幸せになってほしいよ、バーバラ、あの坊主と結婚していれば——

(大佐は、もう少しできわどい状況をばらしてしまうところだったことに気づく。大佐は、「見てご覧。あいつのことは一言も話さないよ」と言わんばかりに、得意げに妻を見つめる。老妻は彼の助けに馳せ参じる。)

エレン 多分、デリン大尉にはちょっとやらなければならないことがあったのよね。バーバラ、あなたもよね。ジョン、二人は一時間もしたら出発するから。

(一瞬の間、大佐はふたたび危険に陥る。)

大佐 デリン大尉、バーバラを庭に連れて行くんだったら——(大佐は、すぐさま我にかえる。) いやいや、庭じゃなかった、庭は勝手に分からないよな、君は。

デリン (微笑みながら) そうでしたっけ、大佐。

大佐 もちろん、知らないさ。いつか教えてあげるよ。(大佐は老妻にうれしそうに合図をする。)
でも、ちょうどあの林の向こうに、いい草地があるんだ。バーバラは道を知っているな。よくあの坊主と一緒に——(大佐は踏みとどまる。エレンが二人に行けと合図すると、バーバラは大佐の両手にキスをする。) 大尉は焼きもちをやくだろうな！

バーバラ おじいさま、よろしいかしら。(大佐のクッションを本職らしくととのえる。)

エレン 今じゃ、バーバラの方がわたしよりもずっとじょうずなのよ、ジョン。

(大佐は、最後に一つ助言を与える。)

大佐 わたしだったら川のところを下っていったりはしないな、バーバラ——あのハンノキがある淵のあたりは。そこは——そこは眺めもよくないしな、大尉。それで男の子が——わたしの知り合いの男の子だったんだけどな、よく——まあ、特に誰ってわけでもないんだが——ただこの家に来ていた男の子なんだが——今はいないよ——今は軍務についているんだ。あのハンノキの淵には行かない方がいいな、バーバラ。

バーバラ ええ行きませんわ、おじいさま。

(バーバラと夫は出て行く。大佐は二人が去るのを待ちきれない。大佐は、自分がうまくやりとげたと妻が思っているか聞きたくてたまらないのだ。)

大佐 わたしはうまくやったよな、エレン。

エレン すばらしかった。あなたのことが誇らしかったわ。

大佐 完全に二人を煙に巻いてやったな！ 二人ともまったく考えもしなかつただろう！ わたしだって時にはずる賢くなれるんだよ。エレン、あのハンノキは切ってしまうおうと思うんだが。もう男の子もいないしな。

エレン あなたにおまかせするわ、ジョン。また男の子が生まれるかもしれないしね。何かご本をお読みいたしましょうか。⁷ お好きでしょう。

大佐 ああ、読んでくれ——できれば、何かおもしろいものを。サム・ウェラーがいいか！ いやいやサムも戦争に行ってしまったな。ピクウィック氏のところを読んでくれ。やつはとてもおもしろいからな。もしやつがあこのイワナを捕まえようとしたら、きっと落っこちているだろうな。ちょうど今朝、バーバラが落ちたようにね。

エレン バーバラがですって。

大佐 バーバラはあのハンノキの淵のところにいるんだよ。ピリーもあのやさしいドイツの男の子と一緒にそこにいるんだ。叫んだり、笑ったり、あいつらのうるさいこと、うるさいこと。

(エレンは、本棚から戦時に一番ふさわしい本を取り出す。)

エレン どこをお読みしましょうか。

大佐 ピクウィック氏があやまってご婦人の寝室に入るところを。

エレン はい、あなた。でもすっかり覚えているんでしょう。ほら、もう笑い始めてる。

大佐 お前も笑ってるじゃないか、エレン。止めようがないんだよ！

[完]

⁷ この後に出てくるのは、Charles Dickens 作の滑稽小説 *The Posthumous Papers of the Pickwick Club* (1836-37)であり、Sam Weller も Mr Pickwick もこの小説の登場人物である。なお、「ピクウィック氏があやまってご婦人の寝室に入る」のは、第22章の「大白馬亭」での出来事である。

＜解題＞

本稿は、ジェイムズ・マシュー・バリー (James Matthew Barrie, 1860-1937) による一幕劇「バーバラの結婚式 (*Barbara's Wedding*)」(1918) の本邦初訳である。翻訳の底本としては、James Matthew Barrie, *The Plays of J. M. Barrie in One Volume* (New York: Charles Scribner's Sons, 1945) 所収のものを使用した。

この劇は、第一次世界大戦中の1917年に執筆されたと推定されているが (Birkin 231 など) 初演は遅く、1927年8月23日にロンドンのサヴォイ劇場 (The Savoy Theatre) でアウグスト・ストリンドベリの『父』の前座となる幕開き劇 (curtain-raiser) として上演された (Markgraf 116)。なお、主役の「大佐 (The Colonel)」は、第一次世界大戦中は自らも英国陸軍航空隊パイロットとして従軍したロバート・ロレイン (Robert Loraine, 1860-1937) が演じた。

もっともこの作品の発表自体は早く、異同はかなりあるが、ジョン・ゴールズワージー (John Galsworthy, 1867-1933) が編集した雑誌『起床喇叭 (*Reveille*)』の第一号 (1918年8月) に掲載されたのが初出である (その後、同年11月に出版されたバリーの『戦争の反響 (*Echoes of the War*)』という一幕劇集にも収録された)。「バーバラの結婚式」は、この雑誌の編者ジョン・ゴールズワージーの「問題の核心」やジョゼフ・コンラッドの「最初の知らせ」という文章の次に掲載されている。なお、この『起床喇叭』という雑誌は、「傷痕を受けし水兵および陸軍兵に捧げる」という副題の通りに、傷痕軍人のための評論誌であった『生還 (*Recalled to Life*)』を受け継いで出版された雑誌である。そのため表紙裏の頁には、戦闘で受けた傷を癒すための“The Plurostat”と呼ばれる電気治療器具や「エッセンシャル義肢会社」の広告が載せられており、第一次世界大戦がどれだけの人的被害を英国社会にもたらしたかをかいま見ることができる。

「バーバラの結婚式」は、老齢のために過去と現在の区別がつかなくなってしまった「大佐」を中心に据え、彼の朦朧とした意識をフィルターにしながら第一次世界大戦がもたらした英国社会の変化を映し出している。戦争が始まって年月が過ぎ、当初の愛国的熱狂が消え去ったあとの英国のとある家族のひと時を描いたこの作品から浮かび上がるのは、この国が大きな喪失 (loss) を被って変化を遂げたという感覚である。

戦争前の「大佐」の田舎の邸宅では、孫世代の若者たちが国籍を問わず愉快地跳ね回る姿が見られたが、戦争がすべてを変えてしまった。この戦争には、「大佐」がインドやクリミア半島で武勲を誇った時のような「栄光」など微塵もなく、ピリーの若い世代が多く、貴い命を失い、その甚大な人的損失が社会に決定的な影響を与えたことが示される。

実際この作品の執筆時には、すでにバリー自身も大きな喪失を経験している。バリーが両親の死後に後見人をしていて、ひとかたならぬ好意を抱いていたルウェリン＝デーヴィス家の長男ジョンが戦死しているのだ（1915年3月15日）。彼らのような若者たちが一人一人戦争に駆り出されては命を落としていく様子が、作品中ではクリケットの試合に仮託して比喩的に描かれている（脚注3参照）。その不安を隠せぬイメージは、英国が戦争に突入する以前の段階ですでにバリー自身が抱いていたものであった。

——「最後のクリケット試合」——宣戦布告の一、二日前——私の不安と予感——子どもたちはオークロッジで楽しくクリケットに興じている。私は窓から見ている。私には、彼らがやがて苦しまねばならぬとわかっている。一人また一人、子どもたちは消えて、次第に数が減ってゆくのがわかる。(Birkin 231)

そして、ビリーの戦死はもう一つの変化を示唆することになる。彼の許嫁であった中産階級の娘バーバラは、ビリー亡き後で看護婦という職を得て、かつて庭師であったデリン大尉といわば身分違いの結婚をすることになる。これまでの価値観や常識が変わり、社会は戦前とは違う姿へと変容し、人々はそれを受け入れざるを得ないという状況が示されているのだ。本学会誌第54号で翻訳した『決行の日』の解題で指摘したが、バリーの作品には三部構成のものが多い。すなわち、「現実から夢の世界（超現実的世界）に行き、そして再び現実」に戻るといふ筋立てである。しかしながら、この作品は戦争を「幕間」にはさみ、戦前の桃源郷的世界から戦争を経験した現実世界へと、不可逆的に一方向に進んで終わる。私たちはもう以前の世界に戻ることはできず、失われた時代を偲びながら生きていかざるを得ないということが痛切に感じられる構成である。

最後に「大佐」と妻エレンが、ディケンズ作『ピクウィック・クラブ』の楽しい虚構世界について語ることで明るい空気がいつとき生まれるが、それは舞台を覆う喪失感をめぐり去ることはできない。人間が老いを避けられぬように冷淡無情に時は流れ、第一次世界大戦が引き起こした「喪失」は英国社会を一変させ、元に戻ることはない。このように、時代に蔓延する喪失感と時がもたらす不可逆的変化の無情さを捉えた「バーバラの結婚式」は、すでにのちの傑作『メアリー・ローズ (Mary Rose)』(1920)の主題を先取りし、その下地となっているのである。

<参考文献>

Birkin, Andrew, and Sharon Goode. *J. M. Barrie and the Lost Boys*. 1979. New Haven: Yale UP, 2003.

Galsworthy, John, ed. *Reveille: Devoted to the Disabled Sailor and Soldier*. No. I. August, 1918.

Markgraf, Carl. *J. M. Barrie: An Annotated Secondary Bibliography*. Greensboro, NC: ELT Press, 1989.